

論文審査の結果の要旨

氏名：森 口 正 倫

専攻分野の名称：博士（医学）

論文題名：Early cancer-related death after resection of hepatocellular carcinoma
(肝細胞癌切除における早期癌関連死亡)

審査委員：(主 査) 教授 後藤田 卓 志

(副 査) 教授 石 井 敬 基 教授 岡 田 真 広

教授 櫻 井 裕 幸

本論文タイトルは「Early cancer-related death after resection of hepatocellular carcinoma (邦題：肝細胞癌切除における早期癌関連死亡)」で、肝細胞癌切除後の肝内再発による早期死亡の因子について検討した。原著論文は *Surgery* 誌 2012;151:232-237 に掲載済みである。

肝細胞癌は一般的な癌種で、外科切除が根治的治療の一つであり手術技術や周術期管理の進歩によって手術死亡率も低い。しかし、5年再発率は70-80%、1年以内の再発率も20-40%と報告されており高率である。特に進行肝細胞癌では顕著で、切除可能と判断しても切除後早期の肝内再発死亡例が多いのであれば手術適応について再考が必要と指摘されている。

本研究は、日本大学医学部附属病院消化器外科において根治的外科切除が施行された350例を対象とした遡及的検討である。術前評価項目である性別、年齢、病因、総ビリルビン値、プロトロンビン、血清アルブミン値、腹水、肝性脳症、腫瘍個数(単発対多発)、最大腫瘍系(<50mm対≥50mm)、画像上の門脈侵襲、AFP(≤20対>20ng/ml)、ICG15R(<10対≥10%)、ATL(<40対≥40IU/L)、AST(<40対≥40IU/L)について早期死亡群とそれ以外の群とで比較した。1年以内の肝内再発死亡例は14例(4%)であった。多変量解析にて、多発腫瘍、脈管侵襲、血清AFP>20ng/ml、最大腫瘍径≥50mmの4因子で有意差を認め、3因子以上で陽性と2因子以下の陽性とで生存期間に有意差を認めた。4因子のうち3因子以上を有する症例は肝切除の適応を慎重に判断するべきだと結論した。

本研究の **limitation** は、肝内再発による早期死亡例が350例中14例と少ないこと、単独施設における遡及的検討であること、**external validation** がないことである。

手術技術や画像診断、内科治療の進歩は著しく、これらを考慮した大規模な前向き研究によって検証する必要がある。しかし、術前に知り得る臨床的な情報を用いて手術適応の可否を判断するための情報として非常に有用と考える。

よって本論文は、博士（医学）の学位を授与されるのに値するものと認める。

以 上

令和 2 年 1 月 22 日